

＝クアラルンプール、ペナン、国際列車旅情篇＝

マレー半島滞在日記

川村史記

【1990年8月6日（月曜日）－自分の誕生日に、チェンマイ行きの飛行機の中－】

去年も今年も自分の誕生日（8月6日）を東南アジアの空の下で迎えたが、今朝、タイの英字新聞－THE NATION－はイラクのクエート侵攻状況を第一面トップで伝えている。大見出しの下に、『日本、経済制裁を実施』という一文が印字されてはいるが、なんとなく付け足し風。東西冷戦時代の終焉がもたらした、新たな地域紛争時代の幕開けとして、1990年8月2日のイラク（サダム・フセイン）によるクエート侵攻は、回教国の新たな火種を歴史の中へ刻み込んでゆくことだろう。

【1990年8月8日（水曜日）－バンコクへ戻る飛行機の中－】

チェンマイからバンコクに戻るタイ航空に乗り合わせた臨席の（ジャカルタ出身）インドネシア人とありきたりの会話を交す。『チェンマイへは何をしに』『手織りの会の仲間と小旅行です』『チェンマイは涼しくていいです』『熱いといってもバンコクよりは涼しいですね』『とんでもない、ジャカルタからみれば、チェンマイは天国ですよ、5日間、のんびりしました』『ああ、そうですか』『毎年、日本から来るのですか』『たまたま、去年も来ましたが、毎年というわけではありません』『とにかく、うらやましい』『・・・・・・』赤銅色の皮膚をしたその美男子は、言葉が途切れたところで新聞を読み始めた。回教徒らしいこのインドネシア人の奥さんは、小太りの顔に黒っぽいレースのベールをかけて、息子（小学生低学年といった年頃）の世話に余念がない。やがて機内食の配布が始まる。面白い光景を目にしたのはここからだ。例のジャカルタ紳士は、食事や飲物のトレイやカップが自分のテーブルに置かれるたびに、それを取り上げては奥さんに渡してしまう。そうでなくても狭い奥さんのテーブルは満杯。そして、自分の食べたい物だけを奥さんに指示して調達しながら、悠々と新聞を大きく広げて読み続けている。高齢化社会の今の日本で、50代以前の《若者》がこんなことをしたら、離婚に発展しかねないのではないか。まして、20代のアッシー君（女友達の送迎を下心なしに、車でこまめに行うフェミニストーただし、和製英語としての意味－だそうな）達は彼女もできない、寄り付かないということになりかねない。これはこの家族に特有のことなのか、はたまた回教圏の男のマナーなのか・・・・小生にはよくわかりませんでした。

【1990年8月9日（木曜日）－高速道路の路側帯を突っ走る－】

昨夜、チャオプラヤ河の岸边にあるシーフード・レストラン『サボイ』で、仲間と分不相応の御馳走を食べた。美食の余韻がまだ残っている腹をさすりながら、今朝、ホテルのプールで一泳ぎする。建築家のNさんも私もゼンソク持ちなので、水泳は体調を整えてくれる。

部屋に残っている教員のMさんは、今後の旅程を検討している。ラオス、シンガポール、マレーシア、オーストラリア、ドイツ等の大使館が建ち並ぶバンコクのサントンタイ通りとラマ四世通りが交差する付近の路地裏に、安価な航空券を商う旅行斡旋業者が軒を並べている。我々はその中で最も信用のあるメディア・インターナショナルへ前日に電話をかけ、マレーシア行きのチケットを手配する。

プールから上がって待機していると電話が鳴る。受話器を取ると旅行事務所を運営する中国系オーナー（50代の主婦）の流暢な英語が聞こえてくる。1時30分発のマレーシア航空クアラルンプール行きがあるとのこと、NさんもMさんも同意して、10時頃、チケットの受取に行くことで話を決める。一段落して、一同朝食。

朝食後、ホテルで客待ちのタクシーを捕まえ、滞在中のセンチュリー・ホテルからメディア・インターナショナル経由→ドムアン空港までの長距離を300バーツ（約1500百円）で交渉、不満そうな運転手を尻目にさっさと乗り込む。10時10分頃にメディア・インターナショナルに到着する。待つこと40分・・・我々のイライラと店主のイライラが頂点に達した頃に、のんびり顔のバイク男が慌てる様子もなく、チケットを届にきて、無造作に放り出す。店主の激しい言葉も馬耳東風とバイク男は飄々と立ち去っていく。

我々が挨拶もそこそこにチケットを握って飛び出すと、シビレをきらしたMさんがタクシーを降りて、こちらに歩いてきている。それもそのはず一時30分発の便に乗るのに、今や一時近く、ドムアン空港までの渋滞を考えれば、一時間で行けるかどうかはなほだ怪しい（空港は出発の二時間前に手続きを済ますのが原則）。こうなりゃ、日本人得意の金にものをいわせて、タクシー運転手の尻をはたくほかない。空港まで締めて五百バーツの一声に、運転手は大喜び、飛ばすは飛ばすは、恐いくらい。古いゲーム・センターにある旧式の自動車運転ゲームよりも何倍も難しい混雑と、各車両による乱暴な運転の合間を、さらに輪をかけた乱暴さで警官の目を盗みながら爆進する。それもサイド・ミラーの無い車ときているから、冷や汗が乾いて、塩が吹き出しそうである。しかし、バンコクのプロは筋金入りらしい。12時を少しまわった頃までに、我々を国際空港に届けてくれた。

12時20分にボーディング。米国人がやたらに多い。一時30分頃、ほぼ定刻の出発。どっと疲れる。しかし、ろうけつ染めの民族衣装を着けたスチュワーデスは全員マレー系のウルトラ・スーパー美人ーちょっと疲労が回復する。『回教国で、顔を隠さなくてもいいのかしら』などと余計な心配をしている内に、ランチの機内食で何を食べたか忘れる始末。通常、女性との交際に縁が薄いとはいえ誠に情けない。情けないといえば、初老の米国人

が孫のようなタイ娘をつれて、束の間の《青春》を自墮落に楽しんでいる。何をするのも勝手だが、本国ではこんなことはできないでしょう。もちろん、日本人のリフレッシュ・ツアーのイメージも重複して、何んとなき気が滅入る。しかし、空はよく晴れて、眼下に見える雲も海も美しい。バンコクを離陸してから1時間50分ほどで、蛇行する河と一面の緑、油ヤシのプランテーション、そして開発地域の赤茶けた山肌等々が間近に迫ってくる。クアラルンプールに到着である。

●クアラルンプール（濁った河口の意味）●

タイのチェンマイ近郊に在住する老婦人を見舞った後、クエートへのイラク軍進攻の状況を小耳にはさみながら、クアラルンプール（スバン）国際空港へ到着した我々の目に、開放的でシンプルな服装のタイ人女性とは異なるマレー人女性の服装（頭のとっぺんから足の先まで衣装にくるまり、露出しているのは手と顔の正面のみ）が物珍しく映った。回教徒の慣わしとはいえ、暑い日差しの中をあでやかな民族衣服を身にまとって闊歩している美しい姿は、隠している分だけ余計に官能的であった。一方、イスラムの男達はそうした女性達を横目に見ながら、自分の内なる暴君ーサダム・フセイン（煩惱）ーを退治しかねているようにも思えた。そんな客の心を見透かすしたのか、中国系のタクシー運転手は我々日本人へ、しきりにマッサージを勧める。空港から市内中心部まで30分（約22キロ）の道程は、タクシー運転手のサイドビジネス・チャンスでもあるのだ。

古い案内書のお陰で市内に入ってもお目当てのホテルが見つからない。見つかったも、取壊し中とかマッサージ・パーラーに変身している。運転手は愉快そうに『だからいった通りだろう。お客さん、今、マレーシアは日本人と香港の中国人が土地を買占めているんだ。だから旧市街の建物はどんどん解体されているのさ』と、念のいった解説をしてくれる。ギャンブル好きで自前の車が持てないというこの親父、道端に設置された公営ギャンブルのオッズ等を気にしながら、我々へ提供する情報のいちいちに、5ドルだ10ドルだと割増し金をふっかけてくる。腹立たしいというよりは、面白い男だが、あまりこのペースで振り回されるのも面倒なので、我々三名も脅しにかかる。『あんた、我々をおちよくってんの？もういいよ、自分達で探すから』『お客さん、本当に俺がいいホテルを知ってるよ』『もういいよ』『いや、この近くのいいホテルだよ』『いいかどうか、この目で確かめなけりゃわからないね』『なら、確かめてから、紹介料5ドルだ』『まじめにやれよ』『本当だよ、いいホテルさ』とまあ、こんな塩梅のやりとりをワイワイやって、到着したのが中国飯店ーインペリアル・ホテルー。中国系同志の結束は固いようだ。

名は体を表さない典型のようなこのホテルを調べに入ると、一応、エレベータがある。また各ドアには鍵もかかり、バス／水洗トイレ付き、エアコンも使えそう。ツイーンで八畳間位のスペースがあるから、補助ベッドを入れさせれば、3人で泊まれそうだ。愛想の悪い女性のフロント・マネージャーに宿泊の意志を伝えて、一件落着。やかましい運転手の

にぎやかなおあいそにもお別れして、夕暮れ迫るクアラルンプールの町並みをホテルの窓から眺めることにする。

●夜行列車のチケットを買う●

、クアラルンプール中央駅まで、タクシーを拾う。路地にはマレー語、中国語、タミール語、英語が混在し、さまざまな人種がそれぞれの言語で書かれた新聞や雑誌を買っている。

クアラルンプール中央駅は巨大な国立回教寺院の近くにあり、イスラム様式を採用した白亜の外観と尖塔は《天空の城》のように華麗かつ巨大である。国際列車は南北にマレー半島をつなぎ、北はバタワースを経てバンコクへ、南はジョホール水道を経てシンガポールへと到達する。我々は2日後の夜行列車でここからバタワースに向い、ペナン島に数時間立ち寄った後、タイ側の列車に乗り継いで、バンコクまでマレー半島を縦断する。三〇時間以上におよぶ鉄道の旅である。窓口でチケットを受取るまで、むさ苦しいヒゲをはやしたインド系職員（国鉄の職員には何故かインド系が多いようだ）のミスも含めて、四五分もかかった《のんびりぶり》と愛想のなさは、日本の国鉄時代を思い出させるに十分であった。

複合民族国家とはいえ、マレーシアは回教が強引に自己主張している国であるらしい。日本の某建築会社の主導で5年の歳月と約1000万ドルの巨費を投じ、1965年に完成されたという国立回教寺院は、近代建築そのもので、回教寺院のモスクとして我々がイメージする外観とは大きく異なり、新都庁のように町を睥睨している。民族同士の結束は固いにしても、町で働く人々の顔に、タイ人のようなのびやかさや豊かな表情はない。旅人にはなんとなくツッケンドンな都市である。とまれ、お目当てのステーキ・ハウスにはたどりつけず、タクシーの運転手の紹介で、ミン・コート・ホテル(各国大使館があるアンパン通りにある)近くのステーキ・ハウスで、空腹を満たすこととなった。

中国系の店で対応もよく老舗の味がした。投宿するホテルの国際電話がかかりにくいため、帰路にミン・コート・ホテルで家族に電話し無事を伝える。

補助ベッドの調達交渉も不調に終わり、NさんとMさんが一台のベッドで窮屈に寝ているのを横目でみながら、小生はもう一台のベッドを占拠して、日誌を書く。いささか心苦しい。微調整の効かないクーラーは消すか、つけるかのどちらかしか選択しようがないので、文明病にかかっている『快適主義』の精神構造には、ちょっとばかり不満がつのる。

寝しなにテレビを見る。輸入もののドラマや漫画やコマーシャルが、脈絡なく提供されている。ニュースのコメントもあまり深さを追及しない。なんとなく流しているような番組作りだ。複合民族国家の相互不干渉を念頭に置くと、こんなものしか制作できないのかもしれない。一つ面白かったのは、マレーシア海域でタイの漁船が違法操業し、拿捕（だほ）されたニュース。コメンテータの口振りにも、こころもち活気がわく。魚には国境が

ないから、釣った魚は昨日まで《タイ》にいたかもしれない。以後、熟睡・・・・・・・・。

【1990年8月10日（金曜日）ークアラルンプールの市街を歩くー】

早朝、国立回教寺院のコーランが街に流れた。ホテルの窓から見下ろすと、屋台にぼつぼつ人が集まってきている。今日は、クアラルンプール市内を歩くことになる。

9時半頃に三人揃ってホテルを出る。エレベータでケバケバしい女性達と乗り合わせる、このホテルがそうした人々のビジネス・ホテルでもあることがわかる。フロントにキーを渡す。仲間同士では笑ったりしているフロント嬢は相変わらず愛想がない。もしかしたら、日本人が嫌いなものかもしれない。

第二次世界大戦中の軍事的侵略や現在の経済的侵略の実情から推測しても、怪傑ハリマオ（実在の虚像）の作り話とからめてマレーシアを思い出すような世代の日本人が大歓迎されているとは思えない。歴史のツケは子々孫々にまで残る。もって肝に銘ずべしである。

我々の投宿しているホテルは、市の中心から2~3キロ北西方向に離れたブキットビンタン通りに面した路地にある。場所的には人と物が騒然かつ猥雑に入り乱れている面白い場所である。通常、こんなホテルに泊まる日本人はまずあるまい。

一方、ブキットビンタン（ビンタンとは星の意味）通りは約1キロにおよぶクアラルンプール最大の繁華街で、デパート、ブティック、レストラン等が入っているブキットビンタン・プラザは隣接するスンゲイ・ウォン・プラザと合わせて、マレーシア・ファッションの中心となっている。二棟のプラザに収容されている店舗数は約千店といわれ、クアラルンプール観光のナイト・ライフ・ゾーンである。

我々は朝食を求めてブキットビンタン通りをブードウ通り（市の中心街に通じる大道り）に向かって歩き始めた。というより、チャパーティー（練った小麦粉を薄く伸ばし、焼上げたインド風のパン）を味わおうと店を探し歩く内に、そっちの方向に進んでしまったというのが実情である。なにせ青春時代をフットボールで鍛えたMさんの脚は強い。わたしはチャパーティー・・・チャパーティーと頭の中で繰返しながら、ヨロヨロと後に続く。建築家のNさんは建物に対する好奇心が旺盛で、東南アジア（タイやマレーシア）の奇抜な建築法ーちょっと、好い加減な建て方に、感心するのが常である。

横断歩道や歩行者専用信号が極端に少ない市内（どうやら、クアラルンプールは車優先社会のようだ）を、チャパーティーを求めて1時間以上も歩いた我々は、街の中心部分近くにある大きなセントラル・マーケット（観光客用に造られたような近代建築のショッピング・センター）の二階で、ついに目的の朝食にありついた。店の奥でインド系の陽気な男性がチャパーティーの生地を見事な手さばきで広げている。小さな丸い小麦粉の塊は、またたくまに薄くて幅広い円形に引き延ばされて行く。熟練した職人の技を見る楽しみは万国共通である。甘いミルクティーとチャパーティーと羊肉のソース煮込み・・・小皿に盛った姿はいかにも軽食といった感じがあったが、食べ終わった後は朝食と昼食を合わせたほ

どに満腹であった。注文をしなくても、客が一皿無くなったとみるや、追加にやってくるウェ이터の、商売熱心を断って、店を出る。

注・・・いささか尾籠な話だが、このショッピング・センターの有料 水洗トイレは 20セント（一マレーシア・ドルは約 50～60 円）で、別に短いホースが付いており、お尻を洗えるようになっている。ウォッシュレットを先取りしている文化といえようか？

我々は満腹のお腹を抱えて、近接したサルタン・モハメッド通りからチャイナ・タウンに出かける。チャイナタウンはペタリン通りを軸に細い路地にまで広がっており、種々雑多な食べ物、果物、魚、野菜、肉、布地、玩具、下着、雑貨、花、カセット・テープ等がひしめきあいながら、大小の店や屋台に充満している。色彩と臭気と言語と騒音と民族衣装が渾然一体となった情景は、オーケストラの高まりのように、人を異国情緒の虜にする。あまりの刺激に視覚も聴覚も臭覚も脚力も疲労してくる。そうした我々の耳に時折、さざめくようにジャーパニーズ・・・ジャーパニーズ・・・という小声があちこちから聞こえてくる。今の時勢に、日本人が物珍しいわけではない。こうした声は『また、日本人だ』とも『あいつらは日本人だ』とも『日本人め』と言っているようにも聞こえる。それはどちらかといえば否定的な響きであり。現在の東南アジア各地に蔓延している対日本人感》に根ざすくぐもった非難と苛立ちのつぶやきのように思えてならない。

●寺院を見た！●

スクールを避けるために、雨宿りに入ったホテルのレストランでビールを飲みながら、午後 3 時くらいまで二時間ほど暇を潰す。雨はなかなか降りやまない。ウインドウ越しに見る目抜き通りの舗装は欧米の街のようで、片道三車線とゆとりがある。そうした道路上を旧式のイズズ・ジェミニがタクシーに変身して、頻繁に往来している。クアラルンプールの場合、舗道や信号は日本に比べて極めて少ない《車優先社会》であるから、子供や老人が車道を横断するのは至難の技であろう。

この街に来て感じる印象の一つに、中国系のビルや店舗ばかり林立しているという実感がある。マレー人やインド人の顔ものぞいてはいるが、経済の咽喉元を絞めあげているのが誰かは素人目にもすぐわかる。市場や街中の商店街では中国人のオーナーのもと、多くのインド人やマレー人が下働きの労働者として、3K（キツイ・キタナイ・キケンな仕事）に取り組んでいる。

1829 年にマレー半島全域を勢力下に治めたイギリスが鉱山開発に中国人労働者を、天然ゴム栽培にインド人（タミール人）労働者を多数投入したのが、今日の複合民族国家形成の発端となっている。その中で、移民時代から同郷の人々と結束し、共同の生活基盤を確立してきた中国人達は、経済的分野で大きな勢力を構築してきた。マレーシア政府が実施

したブミプトラ政策は、こうした中国人勢力に拮抗するためのいわば強引な対応策である。

注・ブミプトラ政策とルック・イースト政策—各人種間の経済格差是正を大義名分に設定されたマレー人優遇政策で、1990年を目処に、企業の雇用人種構成をマレー系五割、中国系4割、インド系1割に、また資本構成をマレー系3割、非マレー系4割、外国人3割にしようというもの。ブミプトラ政策は日本や韓国国民の勤勉さを見習って、マレー社会の非能率を克服しようというルック・イースト政策とあいまって、マレーシア近代化の重要な柱となってきたが、こうした政策の性格上、様々な確執と混乱を生み出してきていることも事実である。ところで日本の歴史を振り返ってみると、日本人は1910年代から世界のゴム景気にあやかってマレーシアに経済進出していった。1941年12月8日の太平洋戦争勃発以後、日本軍はマレーシアへ積極的に侵攻し、半島を南下。翌年2月15日にシンガポールを占領している。『日本軍の占領により英国の植民地支配が一掃され、マレーシアのナショナリズムを喚起することになった』として、『日本人』を戦後の民族独立運動の立役者にまつりあげる懐古主義者もいる（事実、インドネシアの独立ならびに開放を信じて活動した日本人も多かった）が、英国による植民地統治（利潤搾取）の虚構を踏襲かつ継承しようとした日本の意図はみえみえである。今日のルック・イースト政策に素直に応じられないマレーシア国民の脳裏には、第二次世界大戦の中で経験した、日本の侵略に対する反日感情が根深く残っているのは否めない。

スクールに降り込められてぼんやりと過ごしたひとときを後に、レストランを出る。斜め前のテーブルに座って食事しているインド系の大男は、四皿めの肉料理を食べている。いずれも大皿である。途中で数回、手洗いに行ったりしながら、ビッグ・ランチを食べ続けたこの男の食事風景は、長く思い出に残りそうだ。我々はこれから回教、ヒンズー教、仏教の各寺院を観光する。

●回教の寺院●

国立回教寺院は中央駅に隣接するマレーシア鉄道省の目前にある。巨大なモスクで、5年の歳月と1000万ドル(マレーシア・ドル)を投じて1965年に完成された。5.2ヘクタールの広大な敷地に、高さ73メートルの尖塔や八千人を収容する波状屋根の大ホールが威容を誇っている。ここは東南アジア最大規模の近代的なイスラム『聖地』である。大理石の光る回廊に靴下を履たままで上がったとたん、厳しい警備員の《得意そうな注意》にあう。『まったく、おめえら日本人はよ！ここじゃ、裸足になんきやだめなんだよ。』、彼の顔つきは我々にそう言っていた。

異教徒の内部見学はできないから、我々観光客は博物館でコーランを刺繍したタペストリや、たわいないイステム教の陳列物を見る。陳列してある物より、集団で押し寄せるイ

スラム女性の衣装が興味深い。布の流れるようなラインが頭の天辺から足に至るまで、素肌を包み込んでいる。粘土をロクロにかけて造形したふくよかな生乾きの花瓶に、絹をふわりと被せたような官能美がある。髭面がむさくるしいトルコ帽の男達と、美しい女達、その間をはしゃぎまわる子供達など、すべてのマレー人が晴れ着を身にまとって、数人で、あるいは集団で、グルグルの渦にりながら、カー杯、建物の内から外へ、外から内へと移動して行く（ちょっと、棟方志功の言い回しを真似てみると、こういう表現になる）。偶像崇拜のないこの宗教は、大胆なデザインと細やかなデザインが、あまりにも単調になりがちな壁面や空間を、巧に満たしてしている。後は、アラーの神の声が天空から響くのを待ち、床に平伏すばかりであろうか。

●ヒンズー教の寺院●

チャイナ・タウンの雰囲気に取り込まれるようにヒンズー寺院がある。寺院の境内に入る門の屋根には極彩色を施された八百万（やおよろず）の神々が入り乱れ、空へと積層し、小さな空間に濃密な神話を封じ込めている。門柱にたてかけられたバナナの木と果実は何を意味するのだろうか。

10メートルほど離れた奥の院では人々が集い、火と水を中心に、何かの儀式を執り行っている。双眼鏡でのぞくと、上半身裸の男（さしずめ、小生の感覚では修験者）が、しきりに水を汲んでは祭壇にかけているように見える。

一発だけ、フラッシュをたく。民族衣装の老若男女が一斉に小生のいる門の方を振り返る。彼等の表情がけわしい。相互に距離があるだけに視線がパノラマ・サイズに拡大されて、こちらの顔にバシリと当る。彫が深いインド系の人々の目をまっすぐに見たのは、これが初めてのような気がする。なんとなく、不作法をしてしまったという反省は残るものの、その哲人的な表情が脳裏に深く刻まれた。

天然ゴムのプランテーションを支える労働力として、20世紀初頭にインドから導入されたターミル人の子孫であろうか。欺瞞に満ちた世界列強の力にねじふせられ、重苦しい歴史の皺を刻んできたマレーシアを、底辺に甘んずる少数派（マレー系45パーセント、中国系32パーセント、インド系9パーセント、各種少数民族14パーセント）として、寡黙に支えてきたこれらインド系の人達は、世代にわたる体験としての悲哀を今なお引き摺っているように見える。

ヒンズーの寺は、その装飾のけばけばしさとは別に、深く沈んでいるように見えた。

●仏教の寺●

チャイナ・タウンの狭い路地に商店と肩を並べて、ベンガラ色のくすんだ伽藍が一つ、二つとある。華僑の信仰を集める仏教寺院である。大書された漢字に親しみを感じるが、

八幡宮を窮屈な空間に押し固めたようなコンパクト・サイズと極彩色は、薄暗い空間のゆとり座して、剥げ落ちる伽藍のさまに美意識を刺激される日本人の感覚とは随分違う。僧の姿は見えないが、我々同様の中年男が太くて長い茶色の線香を捧げて、ひざまずき合掌している。ここには日本流の大袈裟な葬式仏教はなさそうだ。

移民時代から地縁や血縁を軸に共同で生活基盤を構築してきた中国系の人々にとって、お寺は心に描く『故郷』そのものなのかもしれない。それにしても、境内は煙い。それもそのはずで、《蚊とり線香》のような渦巻のお化けが、風鈴のように幾つも寺門の梁からぶらさがり、一斉に煙をくゆらしている。薫製になりそうなこの環境の中で、金満家の風貌を備えたこの華僑の祈りは今日も、明日も、あさっても続くことだろう。

*

喧騒を増す夕暮れのチャイナ・タウンに別れを告げ、我々は宿に戻る。長い一日が終わった。

【一九九〇年八月一日（土曜日）－この日も種々ありました－】

連れ立ってきた友人さんが一足先にバンコク経由で日本へ帰るため、見送りにスパン空港へ向かう。市街地から少し離れると、空港へ行く道筋には油ヤシとゴムのプランテーションが目立つ、特に、油ヤシが多いようだ。我々が食べているマーガリンや、風呂で使っている石鹼もこの地のパーム・オイルに多くを依存しているそうだ。

街路樹や生け垣に視界をはばまれて、目立つことはないが、時折、貧しい家並みの集落が車窓から確認できる。運転手の話によると、日本人と香港の中国人がダウンタウンの密集した古い集落を地上げし、新しいビルを建てるごとに、そうした貧困層は追い立てられ、環境の悪い別のアパートに、なかば強制的に移住させられるという。

第一次産品である石油、木材、パーム・オイル、錫、天然ゴム等の輸出で七〇年代の繁栄を築いてきたマレーシアも、オイル・ショックの直撃でリセッションに突入した。しかし、85年以降、パーム・オイル需要と外資系企業の進出により景気は回復し、最近ではエレクトロニクス工業関連製品の輸出が急増してきている。民族・政治・経済の先行きは不透明ながら、《成長の三角地帯》（ゴーン・チョクトン・シンガポール首相が第一副首相当時に打ち上げた構想で、マレーシア、シンガポール、インドネシアを結ぶ地域を、韓中ソ極東経済圏、日本、華南経済圏、インドシナ経済圏に続く、経済特区にしようという構想）の一角として、目下のところマレーシアはASEAN諸国の熱い注目を集めている。

とはいえ、ルックイーストに代表されるような積極的経済政策の蔭で、ボルネオ島に位置する東マレーシアのサバ州やサラワク州のように、熱帯林の大規模伐採や各種開発事業による激しい環境破壊が問題視されているのも、見逃せない深刻な事実である。

しかも、そうしたアジア諸国の経済事情には必ずといっていいほど日本の経済力（腕力）が見え隠れする。1990年6月22日付けの婦人民主新聞は次のように述べている。

『・・・日本は広葉樹から紙をつくる技術のパイオニアで国内のブナ 原生林のほか、マングローブやユーカリ等、世界の木材チップの7~8割を輸入している。特に広告に使うぜいたくな紙、OA用紙、ティッシュなどに、安くて運びやすい東南アジアのマングローブを切りつくしてしまった。・・・略・・・熱帯材（南洋材）については、世界の広葉樹丸太の50%が日本に輸入されている現状、その九割がマレーシアのサバ、サラワク州からくるといふ報告。高度成長期に続く建設ブームの中で、住宅、ビル、家具に使われるのが熱帯材。何百年もかかって成長した木が、使い捨てカラーボックスや、建設現場のコンクリート木枠などで浪費されている・・・』

勿論、我々がそうした地域に足を踏み入れようとするれば、政府機関の厳しい制約を受けるにちがいない。物見遊山の旅で、見てまわれる地域は、観光用に造りあげられた、下半身の見えないマレーシアなのである。とわいえ、回教徒のペールのように、内側が見えないので、なんとなく見えるのもブラリ旅の面白さかもしれない。楽しいことばかりでなく、道にまよったり、危ない目にあったり、食あたりしたりしながら、その国を薄皮をむくように知っていく若者達が増えてほしいものだ。



国際空港のロビーで友人さんを見送ってから市内に戻った我々は、バスで観光スポットを巡ることにした。その時、我々の目前に出現したのが新聞を片手に持ったマレー人、なかなか達者な実践英会話で、我々に話しかけてくる。歌手である自分の妹が日本のビザを取得し、芸能プロダクションの斡旋で日本へ出稼ぎに行くという（よくある話である）。ついでには、不慣れな日本の状況について、母親や妹に話をしよってやってくれないか。タクシーで行けば家はすぐ近くなので、よろしくたのみたい。その依頼の熱心さとしつこさ、そして、我々の危険に対する好奇心もあって、ちょっと付合うことにした。

十分ほどタクシー待ちをして、三人で乗り込む。相手は極めて愛想よく、一人でしゃべりまくっている。そうした会話のあいまに、一マレーシアには何回目か？とか、一クアラルンプールには知人がいるのか？とか、重要なポイントを押さえてくる。まず悪（わる）に違いない。こちらもおおぼら法螺を吹いて、大学時代からの友人が沢山いるのだ、マレーシアには何度もきているのだと応戦した。なんとなく、相手も対応に戸惑いをみせている。そこで友人のMさんがすかさず『名前はなんというのか』と聞くと、『ハシム』という答え。Mさんの言う通り、ハシムなどという名は、日本語の太郎や次郎に匹敵するような、ふっと思い付くありふれた名前である。しかも、タクシーを何処に向かわせようとしているのか、一向に要領を得ない。

そこで、我々二人はタクシーの運転手の肩を叩いて、大きなホテル(ミン・コート・ホテル)の前で停車させ、『用があるなら、我々はここのホテルのロビーに30分だけいるから、妹を連れてこい』とハシムへ言い残して降りてしまった。ハシムの旦那が何をたくらんいたのかは分からないが、こちらの顔が余程、お人好しに見えたのかもしれない。あんのじょう、ロビーのラウンジでコーヒーを飲んでいる我々の前に、再びハシムは現れなかった。し

かし、このホテルにカメラを置き忘れた小生は、中心街に戻ってから再び取り戻すなど、さんざんの結果となった。余計なことはするものではない……。



無駄に時間を潰しすぎたので、タクシーをチャーターしてバトゥー洞穴に向かう。

*市内から北へ13キロメートルほど離れた所にある鍾乳洞で、大小さまざまな洞穴から成る。272段の階段を登りつめる最大の洞穴の場合、空間の高さは112メートルにも達する。洞穴内にはヒンズー寺院が築かれており、ヒンズー祭の時は信徒で埋め尽くされるといふ。低地に広がる小規模な洞穴には、レリーフの形式でヒンズーの神々が極彩色の官能的肢体を躍動させ、壁面に数限りない神話の情景を展開している。どちらかという薄気味の悪い空間である。

巨大な洞穴とはいえ、見てしまえば観光地はしょせん虚しい。そんな所在ない我々を元気に迎えてくれるのが、中国系の若い運転手である。この運転手はこの国における華僑の不満を典型的に代弁してくれる。早口で散弾銃のようにまくしたてるマレーシア批判は、取材癖のある小生には、おあつらえ向きであった。

★運転手の話ー『マレーシアは九つの州（ペナン州、マラッカ州、サバ州、サラワク州を除く）の統治者であるサルタン（回教国の君主）の一人がサルタン会議で互選されて、五年間の任期を務める立憲君主制国家である。この国王は憲法上の国家元首として、その下に立法・行政・司法の行政機構を持っている。サルタン政治は汚職の温床で、国王として選ばれたサルタンは、任期期間中に、あの手この手で蓄財するという。また、一九八一年以来、政権の座にある行政の長・マハティール現首相は政治、経済両面でのブミプトラ（マレー系優先）政策を実質的に一層促進すべく、連続三期目の当選を狙っているという。順調な経済成長、低インフレ、低失業率などの表面的な好材料をフルに宣伝して、主要与党であるマレー系住民の国民組織・新統一マレー国民組織の党勢拡大を画策しているが、中国系の住民には納得いかない政治が続いているという。将来に不安を抱く華僑は資金を国内から流出させるから、国内における華僑の地位は無力化するばかりである。一九六九年五月にクアラルンプールで起きた中国系とマレー系住民の大規模な衝突に際しても、政府はマレー系に武器を渡し、中国系は素手で戦った。その結果、多くの死者がでた。こんな国に未練はないから、いい働き場所があるなら、他の国に行きたい。しかし、マレーシアから中国系が全部でていったら、この国はインドネシアと同じになるだろう。だいたい回教徒の女はベールなどを被って貞淑なふりをしているが、夜になればあちこちで男の問題を起こしている。貞淑なんて嘘っぱちだ……。』

家を建てるにも、車を買うにも、結婚式の費用にも、政府による優遇貸付け政策の恩恵を受けられるマレー系住民に比較して、この中国青年の未来には展望が少ないようである。『結婚？いいね！でも、中国人の結婚式は招待客も多く、費用がかかるから、俺なんかまだ駄目さ。日本人は結婚式にどのくらい金をかけるのかな。一〇万ドル（マレーシア・ド

ル) だって!』彼は肩をすくめて、首を振った。マレーシアの伝統的な布文化《ろうけつ染め(バティック)》の観光スポット=直販所に立ち寄り、中心街に戻るまで彼の体制批判は続いた。

愛想も悪く、雲助まがいノロノロ東京を走るタクシーは例外であるが、旅人にとってタクシー運転手の世間話は、見事に世相を切る場合が多い。しかし、この中国系運転手にとっても、さらなる差別を受けているように(我々には)思えるインド系住民に対する関心は薄いようだ。身に降りかからない、他人の火の粉は気にならないとでもいうのだろうか。



初日に見つからなかったMさん所望の英国風レストランで早めの夕食をとってから、米国映画『ダイハード2(テロリストから飛行機を救う活劇映画)』を観る。マレーシアでは、画面の字幕が三カ国語(マレー系、中国系、インド系)で表示される。この場合、画面の下四分の一程度を埋め尽くす字幕がやたら目の邪魔になる。英語は早口で、暴力的表現が多く、私の貧弱な語学力では三分の一程度しか聞きとれないが、筋が荒唐無稽なため、画面だけで十分理解できる。終了したのは九時半。極めて疲れる映画であった。

我々はクアラルンプール中央駅に急ぐ。バタワースに向かう夜行列車は、夜十時に出発するから、まず、預けてある手荷物を受取り、急いで乗車しなければならない。走るのが得意なMさんは常に、小生の10メートル先を跳びはねている。喘息の薬がきれてきた小生は、いささか息が苦しい。



乗り込む夜行列車はマレー鉄道西海岸線で、イポーやバタワース等の大都市を結ぶ大動脈である。我々は翌朝に、バタワースで下車し、ペナン島に数時間立ち寄った後、タイから乗り入れている国際列車に乗り継ぎ、バンコクへ抜ける予定を立てている。

夜行列車の一等室は上下に寝台を設けた個室で、エアコンも完備しており、我々にとっては極めて贅沢過ぎる環境といえる。定刻より30分も遅れて発車した列車の食堂車で、サービスのコーヒーを飲む。食堂車は楽しそうな若者の顔で埋まっている。彼等はこの食堂車で、夜を過ごすらしい。夜を徹して、若者が旅を楽しむ風情は万国共通であろうか。昼間の疲れが累積的な旅の疲れとなって眠気を誘う。我々は部屋に戻ることにした。

日記をしたためて就寝する。しばらく、揺れているうちにうつらうつらとしてくるが、軌道敷の激しい歪みで、エレベータのようなアップダウンの悪寒を感じる。おそらく、古い鉄道敷をそのままに、たいした補修もせず、使っているのかもしれない。乗り心地の悪さを眠気でカバーしながら、ジェット・コースターのような夜行列車の旅が続く。外の闇は深く、窓の外は何も見えない……………。

【1990年8月12日(日曜日)ーペナン島見聞録ー】

ネクスト・ステーション・イズ・バタワース・・・という声で、朝 6 時少し前に目を覚ますと、やがてドアがロックされ、車掌が切符の回収にやってきた。あと 45 分程度で列車を降りることになる。列車の上下動が激しかったせいか、頭の芯に眠気が突き刺さっている。荷物をかたずけている内に、バタワースに到着する。三浦半島に住んでいる小生には、海浜に近い J R の駅に降りたような感じがする。

手荷物を預けに事務所へ行くと、頭を坊主にしたインド系の巨大な大男が荷物の整理にあたっている。周りで威張って指揮している事務官より、よほど哲学的な顔をしていて、人物画の素材にはうってつけである。午前 6 時 55 分、我々は荷物預かりのチケットを受取りフェリーの乗り場に向かう。

ビンロウジュやヤシの茂みに白砂が映える昔々の《海賊の隠れ場所》ペナン島も、今や、人口 50 万人を抱えるマレーシア最大の観光地である。バタワースの船着場からフェリーに乗れば、わずか 15~6 分程度でジョージタウンに到着する。基本構造だけの殺風景な大型フェリーであるが、甲板に座って、バタワース側から見るペナンの眺望は、海に浮かぶエキゾチックな蜃気楼都市とっていいほど美しい。

日本企業は主に、クアラルンプールから 1 時間程度の圏内に開発されたジョフォーラム工業団地やシャラム工業団地に多数進出しているが、ペナン島には、インテル、ナショナル・セミコンダクタ、AMD 等の米国大手半導体企業が島の東南に位置するバヤン・ルパス空港の近傍に軒を並べており、東南アジアの主要な生産拠点となってきている。

英国植民地の時代から英国人のリゾート地として発展してきたペナン島では、低賃金の労働力確保という目的もさることながら、英語を理解できる層が多いのも、こうした企業進出の大きな理由になっているという。

ユトリロの絵にでもでてきそうなヨーロッパ風の街並みは、朽ち果てる運命にあるように頼りなげだが、中国文字の看板に骨太な生活の活気を感じず。我々は中国寺に続く路地の一角にある中華料理店で朝食（薄味で非常にあっさりとおいしいラーメン）をとる。『ツバを吐き捨てるな』という注意書きが壁に貼ってあるのが、ユーモラスである。ことの善し悪しは別として、中国人の『伝統』が深く息づいている街なのであろう。

しかし、中国寺にはインド系の物乞いが多数たむろしており、老若男女の別なく、観光客のサイフに手を突っ込むようにして、金をせびりとっていく。半端な慈悲心は無用の場所であった。

Mさんはキリスト教徒であり、日曜のミサに参加したいというので、通りがかりに遭遇したセント・ジョージ教会の集会へ足を踏み入れた。1918年に創建されたセント・ジョージ教会はペナン州立博物館の東隣にあり、英国国教会のチャーチとしては、東南アジアで最も歴史があるといわれている。礼拝に参集している人々の大半はインド系の人々であったが、我々のような旅人の参加も 2~3 あり、牧師さんによって紹介されたりもした。約 1 時間位にわたり、聖書講読やお説教、賛美歌の斉唱などがあって散会となったが、どの人々

も見知らぬ者達に親切であった。宗教というものはこうしたものであろう。

庭園でのお茶会で、小生は『ドゥ・ユー・ハブ・ア・チャーチ』と聞かれた。なるほど、教会というものは、個々人が所有し、万人と共有するものであるらしい。小生の答えはもちろん『ノー・アイ・ドゥント』であったが、同じ質問はMさんにも向けられた。Mさんは『イエス・アイ・ドゥ』であったから、その場の雰囲気を変えずに済んだ。

こうして、3時間ほどジョージタウンで暇潰しをした後、我々は海水浴場にでかけることにした。

●悲しきリゾート・ビーチ●

ジョージタウンからタクシーで3、40分ほど海浜に沿った道を走り、ペナン島の北海岸に廻り込むと、バツフェリンギの避暑地に到着する。ヤシの林を背景にして、リゾート・ホテルのプライベート・ビーチが広がり、欧米人や日本人のバカンス客でにぎわうマレーシア随一のリゾート地である。我々もゴールデン・サンズ・ホテルの一部屋を時間借りしてから、海水パンツをはいてビーチに出てみた。

美しい白砂が一面に敷きしきつめられ、キラキラと輝いている。砂は石英とか長石を細かく砕いたような光沢のある粗い粒子で、白砂とはいえ、実際は少し茶色っぽく見える。ペナン島の地質には、古生層や中生層を貫く中生代末の花崗岩に、ペグマタイト質が混じっているというから、この砂浜は天然のものなのだろう。海で泳ぐ感触は何処でも同じで、格別、これといった感想もないが、マラッカ海峡の北の出口（かつて、東インド会社は中国貿易の中継地として、1786年に、ケダの سلطان からこの島を買取り、プリンス・オブ・ウェールズ島と名付けた）で泳いでいるという、歴史的雰囲気に浸ることができた。

リゾート区域の外れには、現地の人々がチラホラ散策している。家族連れで日曜日を楽しんでいるのか、お弁当をひろげている姿も見える。リゾート客に遠慮がちなその姿は、プライベート・ビーチで特権的に遊ぶ我々の心を重くする。真っ青な空と、白い砂浜、広々とした海は本来、こうした現地の人々のものであるはずなのだ。しかし、現地の人々もちょっとしたシッペガイシをしている。というのは、観光客の目が届かない浜辺の端には、生活排水が流れ込んでいる場所がある。透明度の悪い海だと感じたのは、波の荒さだけではなさそうだ。知らぬが仏とはよくいったもので、米人や日本人はこのちょっと汚い海でひと泳ぎしては、ホテルの芝生でながながと寝そべり、極楽を感じているらしい。

我々は40分ほど泳いだ後、緑の芝生に置かれたデッキ・チェアでビールを2杯飲んでから、ホテルで着替えを済まし、帰路についた。タクシーでフェリーの船着場に戻る道すがら、木立の間にかいま見える家々は、裕福なマレーシア人の別荘らしく、かなり贅沢な造りばかりであった。何処の国でも、貧困は目に見えぬ場所へ隠蔽されるものらしい。地上の樂園を演出するペナン島のことなれば、なおさらのことであろう。

* * *

列車に乗り継ぐまでの約 7 時間を十分に楽しみ、間一髪で、フェーリーに乗船し、間一髪で午後 1 時発の列車に間にあった。

●列車で国境を越える●

バタワースから、我々の座席は二等車である。暑苦しい淀んだ空気を古ぼけた扇風機がひたすら攪拌している。汗が絞り出されるような湿気である。直ぐ後の車両には冷房装備の一等車が接続されており、なんともうらやましい。熱帯は暑くて当たり前だが、文明に飼い慣らされている分だけひ弱な愚痴が口をつく。

ところで、この列車はタイ国サイドからマレーシア鉄道に乗り入れている国際列車であり、マレー半島をさらに縦断して、終着駅ファランボン（タイのバンコク）に向かう。我々と乗り合わせている二等車の客には欧米人が多い。でかい図体の女とは思えぬ女や、男とは思えぬ一よなよとした一男が乗っている。しかし、どれもこれも、一人か二人で旅を続けているきままな観光客ばかりである。小生とMさんの座席は通路をはさんで横並びの下段であったが、ブロンドの女性がすでに占拠していた。彼氏と一緒に、上下を確保したいらしい。Mさんは気軽に譲って、小生の頭上に今夜の宿をとることになる。連れの男性がむさ苦しく、無口なのに反し、ブロンドはかなり笑顔が明るく、なんとなく無理を許せてしまう。我々もただの男であることを実感する。

列車は平坦な景色の中を走り始めている。油ヤシの林、ゴムの林、バナナの木で取り囲まれた農家、広大な水田等が入れ替わり立ち替わり、のんびりと視界をよぎって行く。特に、灌漑の整備された水田は印象的である。勿論、南方の主食となる米は主にモミの細長いインディカ種で、我々日本人が常食しているモミの丸いジャポニカ種よりも、味はパサパサしている。しかし、暑い気候の中で食べると、そのパサパサした感覚がむしろおいしく感じられる。少しオーバーに言えば、日本の米が世界一だと考えている人は文化的帝国主義者であるともいえよう。なお、インディカ種は草丈も随分長いというが、列車から見る遠景からは、よく観察できない。ただ、微風を受けて緑の絨毯が揺れる様は、日本の田園風景となんら変わらない。しかし、時折、金色や象牙色の小さなモスクが見える。トルコ帽の駅員さんや色とりどりのベールを被った婦人達が、子供達に手を振っている・・・すべては牧歌的であるが、ここはやはり紛れもないマレーシアである。平坦な景色に、突然、地面のタンコブみたいな奇岩が山を成している風景に出会うこともある。マレー半島にはスズ鉱山などの他に、石灰岩が多いというが、そうした地形の一端なのかもしれない。山越えもあつたりして、二、三時間で、列車はマレーシアの国境を過ぎタイ領内のハジャイに到着する。用務員室のような事務所が設置されており、ここで入国審査を受ける。Mさんがかつて訪れた時には、国境周辺に展開する共産ゲリラ等に対する警戒から、銃で武装した官憲が、ものものしく車内を臨検したとのことであるが、今回は、軽装備の制服が車内を一巡しただけであった、その間、我々は線路際にある事務所の窓口で入国審査を

受けた。審査官は五十がらみの不機嫌な男で、タイ人やマレーシア人には極めて意地悪く不親切に振る舞っていた。フランス人もトラブルが多かったようである。アメリカ人や日本人には不愛想ながら、簡単にオー・ケーがでた。こうした差別も、国の経済力と関係があるのかもしれない。とにかく、列車で国境を越えたのは初めてだったので、小生はなんとなく嬉しかった。

審査を終えて車両の方に戻ると、Mさんが例のブロンド女性と話をしている。フランス人らしいが、英語は堪能である。小生も話に加わってなんとなく打ち解ける。彼女の連れの男性は小学校の教員ということであったが、英語がそれほど得意でないせいもあり、あまり社交性がない。もっとも、あまり英語が得意でなくても、しゃべりまくっている我々がいるのだから、人間嫌いなのかもしれない。その代わりに、女性の方は知的でよく話す。彼女はかつて東京の港区に住んだことがあるらしく、日本の生活費が馬鹿高いことにあきれていて。人工骨のセールスをしている彼女はバンコクにでて彼氏とバカンスを楽しむらしい。タダ喰う虫も好き好きというが、彼の男にはもったいないような女性であるという認識で、Mさんと小生は一致した。

ふと気付くと、国境を越えた車窓の景色はがらりと変わっている。豊かな稲作地帯として知られているタイ南部の水田はどうしたことか旱魃にあえいでおり、何処までいっても水稲の萎え細る荒涼たる風景が続く。気候のこともあろうが、一般的に、タイの灌漑事業は低迷しているようだ。征服されざる国として、『先進諸国』の技術を積極的に導入せず、天意のままに伝統農業を展開してきた結果なのかもしれないが、植民地主義の辛酸をなめながらも、灌漑整備を浸透させていったマレーシアとの対比は歴然としている。山一つ隔てた同じ熱帯の地で、一方は青々とした水稲が茂り、他方は干乾びた田に亀裂が走っている。しかし、そのような雑然とした農業の背後には、明日という日をさほど気にしない、ゆったりとしたタイ人の暮らしぶりがあるのも確かで、クアラルンプールで見た《顔のない複合民族国家・マレーシア》のギスギスとした人間関係とは一味違った生活スタイルがしのばれる。

夕暮れの田園を走る列車からは、厳しい山並みが遠望できる。マレー半島が最も細くなるクラ地峡では、山がますます険しくなるというから、そうした地域に近づいているのかもしれない。夕暮れの空は幾分茜色で、アルコール濃度の高いタイ製ビールが腸（はらわた）にしみる。やがて、ウェイターが夕食を運んでくるが、注文したものと違う。ウェイターは『回教徒だというから、この料理を運んできた。』とたどたどしい英語で反論するが、こちらも一歩も退くつもりはない。この列車は当然ながらマレー人も多いから、ウェイターは回教徒かどうかを注文時に確認するのであるが、我々の注文を聞き間違えたいらしい。我々の英語のせい、彼の耳のせいはこの際は、問題にならない。東南アジアでは自らが正しければ、断固として主張し続けるに限る。1分間と少々の押し問答で、お客にかなうウェイターはいない。うらめしそうな目付きで退散した後待つことしばし、結構元気な声でチャーハンの大皿を2枚、我々のテーブルに置いてくれた。大きなエビが2匹もうま

そうそうに盛られている。チャーハンの中に混ぜられているブタ肉が、回教徒には都合が悪いのだろうか。

我々は広大な風景を見ながら、おおいに楽しんで食事し、エビの頭から尻尾まで残さずたいらげてしまった。隣では、例のフランス人達が一人分のディッシュを仲良く分けあって食べている。我々の大喰いにあきれていたかもしれない。食後のコミュニケーションの中で、『日本人は経済優先で困ったものだ。まるで大きな胃袋ばかりで、フィロソフィーのない生き物のようだ』という、彼女は大笑いしていた。チャーハンの大皿をエビの殻ごと胃袋に収めてしまった、我々の大食漢ぶりが具体的なイメージとなって、彼女を直撃したに違いない。ベルリンの壁崩壊やらソビエト連邦のこと等も話したが、EC統合というバラ色の課題に、思いの外にペシスティックな感想を述べていたのが印象的であった。何処の国でも、政治家のビジョンと民衆の臭覚の間には大きな落差があり、民衆の臭覚の方が将来に対する確かな予見となる場合が多いことを考慮すれば、ドイツへの不信も含めて、この利発な一人のフランス市民が抱いてる不安を軽んずることはできないと思った。車窓は闇にとぎされて、自ずと車内の会話が弾んだ。マレー鉄道の《旅の終わり》をかみしめながら、旅の気楽さもあって、我々は夜遅くまで雑談に花を咲かせた。

【1990年8月13日（月曜日）ーバンコク着ー】

朝8時半頃に、バンコクに到着する。懐かしいタイ特有のパクチー(香草)の臭いが鼻をくすぐる。約34、5時間かけたマレー半島縦断の旅が終わった。フランス人とアドレスを交換し別れる。女性の名はシルビア・メナード。男の名前はと？・・・これはどうでもよい。彼等は我々の薦めに応じて、北部タイへとさらに旅を続けるかもしれない。我々はこれから、ファランポン駅のシャワー付き有料トイレで、アブナム（水浴）をし、さっぱりと身支度を整えるつもりである。

―――終わり―――